

10-1 駆け出し時の経験がやる気と自信のきっかけに

1. 立場と仕事

入社3年目のゼネコン社員。50名程度の職員がいるダム工事現場の工事係として、準備工から本工事へ移行するタイミングで着任。現場の中では一番の若手。

2. 遭遇した事態

ダムの盛立品質管理担当として、品質管理の計画・実施や結果の取りまとめを担当していた。専門業者のコンサルタントを含む6名のチームで業務を行っていたが、全員年齢が近い若手メンバーのチームであった。「新人が大切な品質管理部門を任されて良いのか」という疑問を持ちながらも、試験項目、頻度、管理基準などを満足するか等、特記仕様書に従い淡々と機械的にデータを整理していれば良いと考えていた。

品質管理の内容について、先輩から頻繁に類似の質問・状況確認をされるため、品質管理の重要性を自覚し始めていたと同時に、自分の仕事先輩に伝わっていないもどかしさを感じていた。同じ質問が何度も続いたことで、「仕様書の満足だけが本来の品質管理か？」という疑問をいただくようになっていた。

当時、同じ支社管内で3つのダム現場がほぼ同時進行していたが、現在ほど通信手段が発達しておらず、各現場間の連携は取っておらず、隣の現場を参考にするなどの手段は想定できない状況だった。

上司や発注者に説明した内容を理解してもらうには、個々の試験データも重要であったが、トレンド、気象条件や現場背景などによる傾向・統計など、データの全体感を把握してまとめる必要があると感じた。試験結果の整理をワープロでやっている時代に、統計的な整理を行うには時間と労力が必要だった。当時は大型計算機を使うためのデータはパンチカードで打ち込む時代であった。パソコンは世に出始めたばかりの時代で、市販ソフトなどはない時代だった。

3. 対応内容とその結果

上司と相談し、了承を得て、社内のパソコンのプログラム開発チームにデータ整理のためのプログラム開発に動いてもらった。先輩を含めた現場の方に理解してもらえる資料イメージを考えて要求スペックとし、それに近いデータ整理ができるよう依頼した。先輩方に理解してもらえるデータ整理を考えるため、土質に関する勉強を徹底的に行った。

その結果、上司や発注者に品質データを説明する際、全体感を持った説明ができるようになり、徐々に理解してもらえるようになり、先輩たちからも「分かった」と言ってもらえるようになった。

当時、検査などで施主に品質記録を説明するのは、現場代理人または監理技術者が行うのが通例であり、若手は必要な資料を書類の山の中から出すのが役割であった。しかし、進取の姿勢で率先して取り組んだ結果、これ以降、検査時の施主への品質記録の説明を任せられるようになり、仕事に対するやりがいを実感でき、駆け出しの技術者として自信につながった。